

平成 29 年 6 月 19 日現在

機関番号：21201
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2014～2016
 課題番号：26370453
 研究課題名(和文) 日本語の態関連構文の連続性に関する研究：岩手方言「さる」のvシステムの観点から

研究課題名(英文) The Syntax of the Sar- Expression in Iwate Dialect and Its Implications for Voice System in Japanese

研究代表者
 高橋 英也 (Takahashi, Hideya)
 岩手県立大学・公私立大学の部局等・准教授

研究者番号：90312636
 交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、(i) 接辞arおよびeが関与する動詞の自他交替、(ii) 東北・北海道方言で生産的に使用される自発・可能表現であるラサル形式、(iii) 可能動詞化の方言上の多様性としてのラ抜き言葉やレ不足言葉という、互いに関連しつつも独立した、日本語のヴォイスに関する3つの言語現象に焦点を当てて、分散形態論の基本的想定における重層的動詞句構造という観点から、形態統語的分析を提示した。本研究は、理論言語学と方言文法の相互理解が示唆するところの大きさを示す事例研究と言える。

研究成果の概要(英文)：This study considered empirical phenomena in the domain of Voice in the Japanese language which include (i) causative/inchoative alternation with ar- and e-, (ii) the spontaneous and potential usage of sar- expressions in Iwate dialect, and (iii) dialectal variations of potential verbs such as ra-dropped and re-added expressions in Tokai area, from the view point of the decomposition approach to the structure of VP. This study revealed that those three phenomena are given a unified treatment in morphosyntactic terms: the morphemes s-, ar-, and e- are distinct bundles of syntactic features and thus occupy three distinct syntactic heads in the multi-layered VP structure, which is followed by the "late" lexical insertion in PF. Specifically, it was shown that the apparent diversity on the occurrence of the morpheme e- is naturally captured on the assumption that it is the realization of the topmost verbal functional category Get.

研究分野：人文学・言語学・統語論

キーワード：ヴォイス 分散形態論 重層的動詞句構造 自他交替 可能動詞 ラサル形式 ラ抜き言葉 レ不足言葉

1. 研究開始当初の背景

Chomsky (1995) や Kratzer (1996) 以来、動詞句を構成する機能範疇の階層性は大きいに研究者の関心を集めてきたが、未だに統一の見解に至ってはいない。それに関連して、Marantz (1997, 2001) らによる分散形態論では、「動詞機能範疇に具現する形態辞が語根√Root に後接することで、動詞句が重層的に拡張され、語としての動詞が形成される」と提案されている。この提案に立脚すると、日本語の動詞が示す膠着性については、動詞機能範疇の階層性の反映として捉えられることが期待されるものの、依然として、問題点や課題が多く残されている。

2. 研究の目的

本研究では、理論言語学と方言文法の相互理解の示唆するところの大きさに鑑みて、(A) 接辞 *ar* および *e* が関与する動詞の自他交替、(B) 東北・北海道方言で生産的に使用される自発・可能表現である「さる」形式、(C) 可能動詞化の方言上の多様性としてのラ抜き言葉やレ足す言葉という、互いに関連しつつも独立した、日本語における3つのヴォイス関連現象を個別課題として、分散形態論の基本的枠組みにおける重層的動詞句構造という観点から形態統語的分析を提示することを目指した。

3. 研究の方法

上記 (A), (B), (C) の個別課題を追究するにあたり、まず第一に、先行研究の知見に基づき、日本語における動詞句の基本構造として、語根√Root が機能範疇 *v*, Cause, Voice, Get によって拡張される (1) を出発点とした。

(1) [GetP ... [VoiceP ... [CauseP ... [vP ... √Root ...
v] Cause] Voice] Get]
そして、先行研究に従って、(i) 自他交替を具現する接辞は Cause を占め (Pylkkänen (2002, 2008))、(ii) 他動詞の外項と内項は、それぞれ Voice と *v* に認可され (Kratzer (1996), Borer (2005))、そして、(iii) Get は動詞 *u* 'get' の文法化された語根で、主題役 Experiencer を付与する (Nakajima 2011, 2015) と仮定した。

その上で、(1) を構成する動詞機能範疇の形態的具現に関する (2) を、本研究において検証の対象となる作業仮説として設定した。

- (2) a. 語彙的使役[+Cause]は、接辞 *s* として Cause 主要部に具現する。
b. [+Middle] Voice は、接辞 *ar* として具現し、外項を抑制する (cf. 影山(1996)), Alexiadou (2010))。
c. Get は、動詞 *u* 'get' の文法化された語根で、接辞 *e* として具現し、Experiencer を認可する。他方、動詞句において表出されるイベントにおいて含意される「獲得・到達・完遂」といった意味的概念と結びつく (cf. Nakajima (2011, 2014))。

これらの作業仮説の妥当性を検証する目

的で、個別課題 (A) (B) (C) について理論的および実証的視点から考察した。その過程では、国内外の学会、研究会、および講演における研究発表、および多数の研究者との意見交換を行った。

4. 研究成果

課題 (A)

(1) 方言である「さる」形式と標準語の *ar* 自動詞のいずれにおいても、「動作主の主語位置からの取り外し」と「動作主による意図とは異なる外的要因の存在」が関与するという観察に基づき、接辞 *ar* の形態統語論として、(i) 外的併合による(動詞本来の)外項の導入を阻止し、(ii) そのかわりに、非顕在的な出来事項 (cf. Davidson (1967)) を導入することを提案した。

(2) 「さる」形式と *ar* 自動詞が共に示す、到達事象としてのアスペクト性に対して、語彙的動詞アルから接辞 *ar* へ至る文法化の過程により説明を与えた。他方、標準語の本動詞アルおよび山形方言の *ar* 自発形式と、「さる」形式の間で見られる、与格名詞句の認可についての差異が、文法化・機能辞化における語彙的性質の希薄化に還元されることも示した。特に、「上がる」「務まる」のような接辞 *ar* による自他用法が、本動詞アルが示す「存在」と「所有」という二つの統語構造を反映していることを提案した。

(3) 存在・所有形式としての本動詞アル自体の形態統語論に関して、伝統的分析を批判的に検討し、「存在形式から所有形式への統語的連続性」を実装する分析を提案した。具体的には、存在形式については、Takano (2011) の意味での Double Unaccusative Construction として、他方、所有動詞アルについては、BE 動詞としてのイルと音形を持たないPの合成により、それぞれ派生されることを提案した。

(4) 日本語研究において伝統的に単一の形態素として扱われてきた受動形態素 *ラレ/(r)are/* が、(r)*ar+e* と分解されることを提案し、いわゆる「両極の *e*」が、統一的に、Nakajima (2011, 2015) の意味での機能範疇 Get に還元される可能性を追究した。具体的には、Nakajima (2011, 2015) と同様に、Get 主要部について、重層的動詞句構造における Voice の上位を占め、その指定部に主題役 Experiencer を付与し、意味的には「到達・達成・獲得」といった概念と結びつくことを仮定した。そして、(i) 「ロープが切れる」における、反使役化と中間構文の多義性、(ii) 「肉が軟らかく煮える(肉を煮る)」「鶴が見事に折れる(鶴を折る)」のような、作成事象を表す自動詞から成る結果構文について、形態素 *e* を Get 主要部と同定することにに基づく分析を提案した。

課題 (B)

東北・北海道方言で生産的に使用される自動詞化「さる」形式について、分散形態論の基本的想定に基づいた形態統語的分析を提

示し、先行研究において観察されてきた、当該現象の示す意味論的・語用論的特性が自然に導出されることを示した。同時に、方言横断的な、そして、方言文法と理論言語学の交流という観点から、日本語の動詞句の重層的構造について考察を行い、その帰結として、「さる」形式から見えてくる日本語の態関連構文の体系について考察を行った。

(1) 「さる」形式に関する先行研究では、あまり取り上げられてこなかった、*ar* 自動詞「集まる」に「さる」形式が後接されて単一の述語形式が形成されている「集まらさる /atsum-ar-as-ar/」のような事例について、方言話者への聞き取り調査に基づき検討したところ、両者は意味的にも区別されることが明らかになった。

(2) 「干す 干ささる/*干さる」(cf. 「乾く 乾かさる/*乾かささる」) といった、佐々木(2007)の意味での「二重サ入れ制約」に対する反例について検討し、「さる」形式に含まれる/s/が語彙的使役化の形態素として同定されることを提案した。

(3) 上記(1)(2)から、「さる」形式はそれ自体で単一の形態素ではなく、動詞化素 *v* + Cause + Voice に分解されることが明らかになった。具体的には、*ar* 自動詞を形成する接辞 *ar* は、「さる」形式に含まれる形態素 *ar* とは異なり、相対的に構造上「低い」位置、より具体的には Cause 主要部に支配される *v* の位置に生起する。他方、「さる」形式に含まれる形態素 *ar* は、Cause 主要部の上位の機能範疇 Voice 主要部を占めることを提案した。結果的に、重層的な動詞句構造において、接辞 *ar* が *v* と Voice のいずれにも分散して具現し得ると分析することで、課題(A)の成果(2)との整合性が得られた。

(4) 「ビールをいっぱい飲まされた」のような、佐々木(2016)が「非正規用法」と呼ぶ他動詞目的語が対格を伴って表出される事例、および、「(海を見たら)思わず走らされた」のような非能格動詞を含む事例についても、動詞句構造上で階層的に区別される二つの接辞 *ar* を想定することで、首尾よく説明されることを示した。

課題(C)

特定の語彙から発生し、かつては方言限定的でもあったラ抜き言葉が、今やかなり広範な地域・話者によって許容されつつある現状に鑑みて、「ラ抜き言葉を生成可能な文法のメカニズム」を探究することは、理論言語学的に有意義な課題であるはずである、という考えに基づき、次の3点について研究を行った。第一に、日本語における可能動詞化の接辞 *e* (例: 読む/yom-u/ → 読める/yom-e-(r)u/)の形態統語的な役割を、分散形態論の基本的想定の下で考察した。第二に、そのような理論的考察から得られる帰結や予測にしたがって、ラ抜き言葉(例: 食べれる/tabe-(r)e-(r)u/)や、その派生形態と考えられているレ足す言

葉(例: 食べれる/tabe-(r)e-(r)u/)を容認する方言(以下、ラ抜き方言と呼ぶ)の話者が、どのような文法メカニズムにおいて、そのような表現を産出・処理するのかについて考察した。最後に、ラ抜き言葉が容認されず、五段動詞についても、接辞 *e* ではなくラレによる形式(例: 行かれる、読まれる)が優勢な方言(以下、非ラ抜き方言と呼ぶ)との比較検討を行い、可能動詞化における方言上の多様性に対して、統一的視座に立った説明を提示した。

(1) 動詞に接辞 *e* が後接することで形成される「読める/yom-e-ru/」のような、いわゆる可能動詞に対して、分散形態論の基本的枠組みに基づく動詞句構造における接辞 *e* の分布という観点から、新たな形態統語的分析を提示した。具体的には、課題(A-(4))との関連で、上述の作業仮設(1)および(2c)を想定し、さらに、接辞 *e* の'small' *v* に対する「再分析」を仮定することによって、「ラ抜き言葉」や「レ足す言葉」といった可能動詞にかかわる方言間の多様性について、統一的視座に立った理解が得られることを示した。その結果、例えば、(i) 自動詞「立つ/tat-u/」に対する接辞 *e* の後接により形成される「立てる/tat-e-ru/」は、可能動詞(自動詞)と他動詞の間で多義性が見られ、(ii) そこに接辞 *e* が付加された「立てれる/tat-e-re-ru/」は、いわゆるレ足す言葉(自動詞)とラ抜き言葉(他動詞)となり、(iii) さらにもう一つ接辞 *e* を後接させた「立てれる/tat-e-re-re-ru/」はレ足す言葉(他動詞)としても容認されないという、一連の可能動詞の派生形式とその容認性に関する事実に対して、一貫した説明を与えることができた。

(2) 「ラ抜き」を容認する話者にどのような文法的メカニズムが備わっているのかという観点から、先行研究においてたびたび指摘されてきた、ラ抜きが適用される動詞の音節数の問題に着目し、(ラ抜き言葉が必ずしも先進的ではない)岩手県在住の成人を対象とする質問紙調査を実施した。その結果、音節数が揃った動詞群内で「ラ抜き」が適用された場合、自他交替における形態的示唆性が、ラ抜き言葉の容認性に統計的な有意差をもたらすとの結果を得た。そして、ラ抜きが適用される動詞の音節数の問題とは、実際には、ラ抜き言葉の形態統語的性質に由来する「見せかけの」一般化であることを明らかにした。質問紙調査は、岩手県在住の大学生43名(平均年齢20.6歳)を対象に実施した。調査の目的は、ラ抜き言葉の容認性に、「音節数以外の形態的条件、特に、自他交替にかかる形態論が影響するか否か」を明らかにすることであった。「曲げる/曲がる、閉める/閉まる」のような3音節動詞群Ⅰ、「丸める/丸まる、固める/固まる」のような4音節動詞群Ⅱ、「建てる/建つ、付ける/付く」のような4音節動詞群Ⅲ、「沈める/沈む、へこめる/へこむ」のような4音節動詞群Ⅳから成るラ抜き言

葉 80 項目 (各 20 項目) を刺激文として使用した。動詞群 I, II では、自他交替が接辞 *ar/e* によって具現化するのに対して、動詞群 III, IV では、他動詞形においてのみ接辞 *e* が顕在化する。被験者には、各刺激文がどの程度日本語として容認できるかについて、5 段階尺度 (5 = 完全に容認できる, 1 = 全く容認できない) で評価させた。各動詞群の容認性の平均値は、動詞群 I が 3.83、動詞群 II が 3.30、動詞群 III が 3.55、動詞群 IV が 3.25 であった。分散分析の結果を踏まえて t 検定を行ったところ、以下の点が明らかになった (統計値は省略)。第一に、自他交替において接辞による形態上の標示パターンが共通した動詞群内における比較では、動詞群 I の容認性は動詞群 II より、動詞群 III の容認性は動詞群 IV よりも、それぞれ有意に高かった。この結果は、「3 音節以下の動詞は、4 音節以上の動詞より、ラ抜き言葉における使用頻度が相対的に高い」という先行研究における指摘を経験的に支持する。第二に、自他交替において接辞による形態上の標示パターンが異なる動詞群間の比較では、動詞群 I, II の容認性は動詞群 III, IV よりも有意に高いことが分かった。ラ抜き言葉の形成に課される制約として、動詞の自他交替における形態的示唆性に言及した、このような報告は、管見では先行研究において見当たらない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4 件)

Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi, The Syntax of Middle Voice in Kesen, Proceedings of the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics: WAFL12 (MIT Working Papers in Linguistics), 査読有, Vol. 12, 2017, (ページ番号未定、12 p.).

高橋英也, 日本語の存在・所有形式におけるイル・アル交替現象, Liberal Arts, 査読有, Vol.10, 2016, 85-100.

高橋英也・新沼史和, 可能を表す ar 動詞における接尾辞 ar の形態統語的役割について, JELS: Papers from the 32nd Conference of the English Linguistic Society of Japan, 査読有, Vol. 32, 2015, 146-152.

高橋英也, 日本語の使役起動交替に対する形態統語的アプローチ, Liberal Arts, 査読有, Vol. 9, 2015, 35-48.

[学会発表](計 9 件)

高橋英也, 可能動詞化の方言上の多様性について: ラ抜き言葉とレ足す言葉の動詞句構造の観点から, H26-28 科研費研究成果発表ワークショップ「動詞句とその周辺」, 2016 年 12 月 17 日、南山大学

高橋英也・江村健介, いわゆるラ抜き言葉の形成における形態統語的制約について, 日本言語学会第 152 回大会, 2016 年 6 月 25 日、慶應義塾大学

Niinuma, Fumikazu and Hideya Takahashi, The Syntax of Middle Voice in Kesen, the 12th Workshop on Altaic Formal Linguistics, 2016 年 5 月 13 日、Central Connecticut State University.

高橋英也・江村健介, 可能動詞の形態統語論に関する一考察: 接辞 *e* の分布の観点から, 日本言語学会第 151 回大会, 2015 年 11 月 28 日、名古屋大学

高橋英也, 東北・北海道方言におけるラサル形式の形態統語論について, 南山大学大学院人間文化研究科言語科学専攻主催講演会 (招待講演), 2015 年 6 月 12 日、南山大学

高橋英也・新沼史和, 日本語における接尾辞 ar の文法化と HAVE/BE 交替について, 日本語文法学会第 15 回大会, 2014 年 11 月 23 日、大阪大学

高橋英也・新沼史和, 可能を表す ar 動詞における接尾辞 ar の形態統語的役割について, 日本英語学会第 32 回大会, 2014 年 11 月 9 日、学習院大学

高橋英也, 自他交替における接尾辞 ar の文法化について, Morphology and Lexicon Forum 2014, 2014 年 9 月 6 日、大阪大学

Fumikazu, Niinuma and Takahashi Hideya, Ar Intransitive as a Complex Verb in Japanese, Formal Approaches to Japanese Linguistics 7, 2014 年 6 月 27 日、National Institute for Japanese Language and Linguistics.

[図書](計 件)

[産業財産権]

○出願状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

Hideya Takahashi Researchgate:

https://www.researchgate.net/profile/Hideya_Takahashi2

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋英也 (TAKAHASHI, Hideya)

岩手県立大学・高等教育推進センター・准教授

研究者番号：90312636

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

()